

十月号

田園

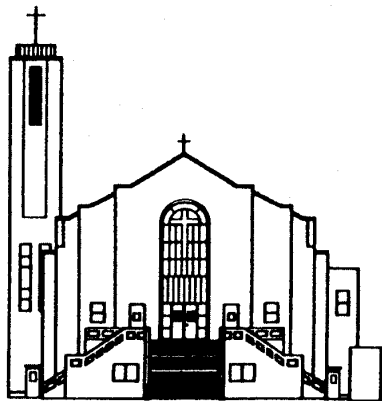
聖フランシスコ カトリック田園調布教会

(No. 702 2021.10.1)

カトリック田園調布教会報

☎03(3721)7271

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-43-1



より良い未来への道

協力司祭 アントニオ金東炫神父

教皇フランシスコは昨年10月頒布の回勅「Fratelli Tutti」(日本語版:兄弟の皆さん2021年9月発行)と12月出版の

「Let us Dream: The Path to a Better Future」(日本語版:「コロナの世界を生きる2021年7月発行」)を通してさまざまな危機に直面している今の世界をいかに生きるべきか、そしてパンデミックのなかで苦しむ人々へ心温まるメッセージを発信しました。

回勅「Fratelli Tutti」の各チャプターでは

- ・利己主義、共通善への無関心、人権侵害と市場論理の支配という「閉ざされた世界

の闇」について、人々の中におられるキリストの御顔を見つめ、疎外された人々に寄り添い、自分自身を他者に開放する「道端の異邦人」すなわち善きサマリア人になること、すべての人の尊厳と権利が守られる「開かれた世界を描き、生み出す」こと、

- ・戦争や迫害、人身取引などによって故郷を離れた移住民を支える普遍的兄弟愛を実現するために「全世界に開かれた心」を持つこと、
- ・共通善に奉仕し、貧しい人々と共にいる、貧しい人々の政治という「最良の政治」を目指すこと、
- ・他者の尊厳を尊重する「対話と社会的友愛」を養うこと、
- ・終わることのない役目である平和のために、他者への奉仕、和解の追求、相互の発

展につながる「新しい出会いの道」に進むこと、・福音の原則に従って共通善、人間の統合的発展のための配慮は教会の役割であり、諸宗教間の平和の歩みと信教の自由を保障する「世界の兄弟愛のために働く宗教」について語りました。

最後に、共通善と各国の利益との間に矛盾が拡大する国際情勢の中で、人々全体の利益という真の連帯を築き、国際社会を「人類」という共存、普遍的兄弟愛へと変容させる「世界平和と共生のための人類の兄弟愛」について述べ、パンデミックの体験から、現状の分析のみならず問題と向き合い、回答を与えることのできる行動を呼び掛けました。

そして教皇フランシスコの公式伝記記録者であるオースティン・アイヴァリーとの対話のまとめである「Let us Dream: The Path to a Better Future(日本語版：コロナの世界を生きる)」では、危機の後にはより悪くなるか、より良くなるかどちらかであると述

べながら、コロナ禍の今こそ、これまでの自己中心的価値観を見直し、より安全で健全な世界を生み出すために行動する時であると強調しました。

教皇は、コロナ禍は現代人にとって試練の時であるが、試練に向き合うとき、自分を犠牲にして困っている人を助ける善きサマリヤ人たちがあらわれる。そうした人たちの強さ、寛容、創造力は今後の社会をより良いものにする原動力になると語り、今の状況を四旬節に比喻し、長い苦悩の後復活であり、今の苦しみは絶望ではなく復活を準備し、価値を回復するときであると励ましました。

「あなたがたは皆兄弟なのだ」(マタイ23:8)

教皇のこのメッセージは使徒的勧告「福音の喜び」と回勅「ラウダート・シ」からも見られる福音的回心生活と普遍的兄弟愛というアッシジの聖フランシスコの思想から現代世界へ発信したメッセージと感じられます。

今は、パンデミック、ミャンマー、アフガニスタン事態など、さまざまな危機に直面している激動の世界が、創造主のみ旨に従って正しく歩むことがどうか、祈りと深い内省とともに明日を準備する時ではないかと思われます。

特に10月は母マリアと共にイエス・キリストによる人類救済の神秘全体を黙想する(聖母マリアへの信心46)ロザリオの祈りの月です。一人の人間は微々たる存在かもしれませんが、祈りという共通の言葉につながっている私たちは決して弱い存在とは言えません。10月、より良い未来、神が見て、良しとされた世界に回復していくように、教会の母であり私たちの母であるマリアと共に心を合わせてお祈りしたいと思います。

「人類の父である主よ、私たちの心に、兄弟姉妹への愛を目覚めさせてください。私たちの心が地上のあらゆる民族と国々に開かれますように。アーメン。」

ヴィルフランシュ・ド・コンフラン (フランス)

柳沢洋子 文・写真

最近読んだ本の中に、大陸の古い町は皆、壁で囲まれているが、日本には関所はあっても集落は壁に囲まれていない、とありました。確かに欧州の古い都市は厚い石壁に囲まれていますし、万里の長城に至っては、大陸を分断するように長い防壁になっています。これはやはり地続きの大陸と島国の考え方の違いなのでしょう。

そこで思い出したのは2012年に出かけたフランスの美しい村に選ばれているヴィルフランシュ・ド・コンフランと言う小さい村です。フランスの南西、スペインとの国境であるピレネー山脈の裾野にあり、人口は200人少々、つまり観光客向けのレストラン、お土産屋の人たちだけ、なぜならこの辺りはピレネーのふもとで、入り組んだ谷あいが続く、農耕にも牧畜にも向き

ません。それでもこの村ができた頃(1090年)はピレネーを超えてスペインとの往来による商人も多かったと言います。しかしそれは同時に戦時には重要な拠点ともなり、村は厚い石壁に囲まれました。今では村を通らずともスペインからフランス南西部の中都市へ通ずる大きな道路もあるのですが、本当に観光客しか立ち寄らず、谷底にある中世そのままと言う感じですが。

谷底の村からピレネーの急斜面を見上げると中腹にフォール・リベリア(砦)があります。

そんなに高くも見えないので、村から通じる坂道を登ることにしました。

ところが急斜面の車道をジグザグに登っていくので、徒歩20分と書いてあったのに、中々上っている感じがしません。途中に徒歩用と看板のある階段があったのですが、南斜面で日差しは強いし、ままよ、このまま歩き続けようとがんばり、30分程度ようやくたどり着きました。

砦ですから、ここも又厚い石壁で囲まれています。あまり広くはありません。それでもコンフランに來たら是非、と書いてあるのも道理で、足元の小さい村が一望できました。

建造1681年、ナポレオン三世の頃に堅固に修復され、フランスで最も「安全な」砦とも言われたそうです。

砦に入った所は広場のようになっていて、今はカフェが一軒あり、私が門をくぐって冷たい飲み物に吸い寄せられるように向かうと、カフェのお姉さんも私に突進してきて、何かと思えば、入場料3ユーロを請求されたのでした。

砦とは言え、常駐していた人々もいたので、食糧庫や小さいながら教会もあります。一応サン・ピエール教会(聖・ペテロ教会)と名前はありますが、今は使われておらず、十字架と祭壇があるだけで打ち捨てられている感じでもありました。

さて一巡りして、又あの暑い坂道をくだるのはなあ、と日陰で腰かけて思案していると、カフェのお姉さんが、下りは階段で行

きなさいよ、と砦の隅にあるドアを開けてくれました。岩を掘った階段が先も見えないほど下に向かっていきます。千段で下に着くよ、出口の扉は開いているはずだから、と言うのですが、開いていなかったら千段登って引き返すの！？と聞きましたら、その時は電話してよ、ここから電動で開けられるから！電話番号は出口の扉に貼ってあるから！と言うのです。

うーむ、人を信じるか、暑い坂道を下るか。私は信じる方を取り、階段を降り始めましたが、後ろで、砦の厚い扉がガシャーンと閉まり、他に人もいないので不安半分でした。昔は敵に見つからずに下の村と行き来できたというトンネル階段ですが、所々に細長い窓が切っており、下の村も良く見え、岩の中ですので、涼しく降りて行くことが出来ました。問題の出口の厚い扉も開いており、ほっとして開ければ、眩しい日差しの中にアベックが立っており、相手も厚い扉が急の中から開いたので、びっくりしていました。上まで何段？と聞かれたので、千段と答え

ると二度びっくりされましたが、中は涼しいから山道より良いわよ、途中で景色も見えるし、と言ったのですが、二人でずっと思索していました。

その出口(階段の上り口？)の脇を見れば、もう一つのサン・ピエール教会がありました。

これは山の上に教会があるところでは見かけるのですが、登れなくなった人々、あるいは登る時間が無い人が、遥拝するためです。私達の場合で言えば、多摩川駅の前に遥拝所がある、と言った感じでしょうか？その後、村を囲む石壁の中にも入り、ぐるりと石壁の中を一周と思ったのに、通路が上下に二重になっていたりして、入ってきた所にも中々戻れず、ようやく出られた時にはへとへとになっていました。

こんな小さな村にも、堅固で複雑な壁を作らなければならなかった背景を考えますが、壁の無かった島国日本に住む私達も「見えない境」を心に設けていなかったか、と考えています。



村全体をフォール・リベリアから撮り下ろしたもの(ネットから)

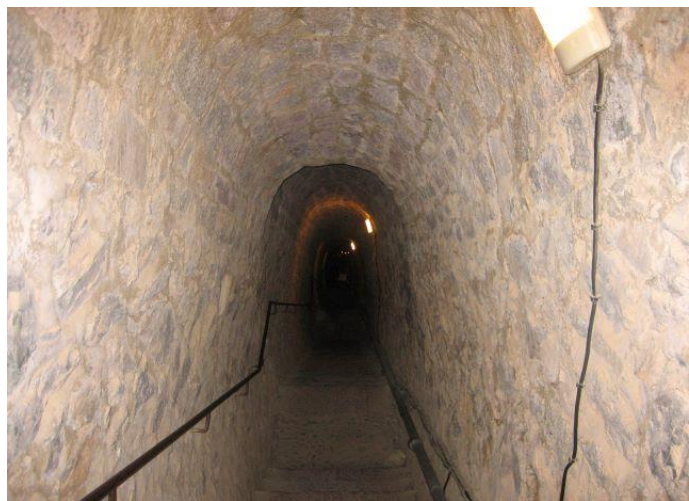
フォール・リベリアの中の広場



フォール・リベリアから降りる階段
の途中から村を見下ろす



村へ降りる階段



岩に通じる階段の入口（私にとっては出口）の扉



村のメインストリートの風景



サン・ピエール教会（村にある遙拝所、後ろにフォール・リベリアが見える）

